

超巨大視野に立つ人間観

—— Teilhard de Chardin をめぐって ——

長戸路千秋

(1)

“パンタ・レイ”，これはヘラクレイトスに帰せられている余りにも有名な言葉であるが、人間がこの言葉を己れのものとして以来すでに2,500年という年月が経過している。人びとは、その間、今日に至るまで、その言葉を愛用し続け、しばしば引用して己れの言葉や文章を飾ってきた。そして、それにはそれだけの理由が十分にあったといえる。なぜなら、万物流転[・]ということの意味するこの簡潔な言葉によって、自然は動いている、人間も動いている。それらの流れは一瞬といえども止まることを知らない、という自然と人間のなまなましい現実の、一寸他の言葉を以て代えがたい見事な直感的把握が示されているといえることができるからである。

ところが、他面において、ヘラクレイトス以後哲学は、そうした根源的現実をより精細に把握しようと努力する長い道中において、いつしか物質と精神の問題につきあたり、あげくの果てには、ホワイトヘッドのいわゆる観念論と唯物論への「不幸な分裂」におちいり、そしてその問題が直接間接今日に至るまで持ち越され、人びとはこの哲学上の対立の中に、パンタ・レイという言葉が適確に表現している自然と人生の流転という根源的事実の持つなまなましさを見失おうとしているといえるのではないであらうか。ホワイトヘッドは、この「不幸な分裂」を、いわば科学的なエネルギー一元論とでもいうべきものを以て克服しようとした人であった。だが、このホワイトヘッドもさることながら、今日では、彼よりもはるかに巨大な科学的視野に立って、物質と精神の区別にはいささかのこだわり

長戸路千秋

をも示すことなく、自然と人間の生々流転の実相を、いわば天真らんまんとでもいうべき態度をもって一元的に把握しようとする立場が示されて、世界の人びとの深い関心を集めている。それは Teilhard de Chardin の人間観であり、われわれはそこに、パンタ・レイの直感の現代的、科学的、哲学的理論化とでもいうべきものを見出だすのである。

(2)

科学、哲学、神学——この巨大な三領域の総合者としてのティヤール・ド・シャルダン神父の名は、今や世界中の異常な関心を集め始めているといっても決して過言ではないであろう。

彼は、1881年に中仏の名門の家庭に生まれ、1911年に司祭に任命せられ、1955年にニューヨークで死んだ。当初、カイロの College of the Holy Family で物理学や化学を教えたが、彼が終始一貫最も深く興味を持ち続けたのは地質学と古生物学であった。

1923年、彼は、中国中部地帯での地質学上の発掘作業を援助する使命をおびて、中国に赴き、そこで旧石器時代の人類の遺跡を発見し、やがて、それより数年後（1929年）の北京原人発見の端緒を開いた。そしてそれ以来、彼はその生涯の大部分を中国で過した。

彼の膨大な数にのぼる科学的論文と神学的なそれのすべては、前述の如く、科学、神学、哲学の三領域にわたる巨大な総合に裏づけられていて、それらは全体として、単に人類の起源の探求たるに止まらず、直ちに同時に、人類の未来の可能性への展望となっていることがその大きな特色をなしている。

彼のきわめて率直大胆な「進化」についての考察が、彼の上司たちを極度に刺戟して、彼の自然科学論文以外のすべてが、彼の属するイエズス会によって、彼の生存中出版を禁ぜられ、はては彼自身の身柄さえも、その自然科学的研究に深い関係のある中国へ、態よく追放せられるという結果

をまねいたことは余りにもよく知られているところである。

しかしながら、彼は、イエズス会の司教として、上長に対しても教団に対しても、あくまでも恭順であり続け、いささかの反抗の態度をも示すことはなかった。ただ、その後も彼の「人間の真理」探求への情熱はますます燃えさかり、彼の生存中においては、彼に直接接した幾多の人びとを、死後においては、その著述の公刊によって、広く世界の人びとを励まし続けて今日に至っている。

彼の伝記の示すその人となりは、ただただ見事と評するほかないものであり、彼の思想体系がその渾然たる総合性の故に“philosophy of wholeness”と呼ばれるとすれば、彼の人となりは、まさに天衣無縫の完成品とさえ呼ばれるべきものであって、彼がレジョン・ドヌールを授けられる際の頌辞の中に、「古生物学と地質学の領域において、彼は今やフランスの誇りとする人びとの一人といえる」とあるのも、実は、これらの領域に関する彼の学識の深さとともに、彼の場合において、それを離し難く背後から支えている彼の人となりをも含めていっているものと解さねばならない。なぜなら、彼のこうした人となりこそ、彼の学説に一大特色を与えるところのものであるからである。

(3)

さて、彼の思想の核心を、簡潔な概観によって示そうとすることは、きわめて困難なことに属するといわねばならない。なぜなら、その主著である『人間の現象』The Phenomenon of man, 1960.を除いて、彼の著述の大部分が、きわめて短かいものであり、その反面、その数はきわめて多く、しかも、それらが相互に重複したり、後のものが前のものの改善であったりして、簡潔な概観を試みることが非常な困難をともなうものであるからである。

ただ幸にして、ティヤール自身が、自らの思想のポイントと思われるも

長戸路千秋

のをえがき出した短文（1948年4月のもの Abbé Paul Grenet : Teilhard de Chardin——The man and his Theories, 1965. 所収）——多分、それは自分自身の思想を反省して見るためのものであったと思われる——が存在する。従って、われわれはこれをもって、彼自身によってえがかれた彼の思想の全貌のスケッチともいふべきものと見て差支えないであろう。さしあたり、今はこの短文の示す方向に沿って、彼の思想の流れを追ってみることにする。

本質的にいって、テイヤール・ド・シャルダンの思想は、彼自身しばしば繰り返して述べている如く、「形而上学」に属するものではなく、彼のいわゆる「現象学」に属するものであった。しかしながら、ここに注意すべきことは、彼がこうして「現象学」と名づけるところのものは、通常、フッサール等の名によって知られているそれではなく、自然科学者がその研究の対象としている現象や事実という意味の「現象」の学問にほかならなかった。しかしながら、彼によれば、こうした科学的な諸現象や諸事実を、あくまでも忠実に、そしてあくまでも謙虚に、追求して行くと同時に、どこまでも忠実に、そしてまたどこまでも謙虚に、それらの総合を続けて行きさえすれば、真理への道は限りなく開け、ついにはその“divine author”にまで通じて行くはずであるという科学者の確信を、この言葉で表現しようとしているところに、彼の思想の特徴が存在しているといえるのである。テイヤールはこのような立場に立って自然と人間の探求を進めていく。

彼はまず第一に、あらゆる自然（人間をも含めて）の現象を創り出し、それらを支配するある種の法則が、われわれによって科学的に（古生物学的に、地質学的に）観察可能であることを信じて疑わなかった。彼はそれを“law of Complexity-Consciousness”（複雑性—意識の法則）と呼んだが、その意味するところは次の如くである。

- (1) 悠久の時間過程を通じて、物質はその構成において、次第にその複雑性（複合性）を増大していくという進化の傾向を持っている。具体的にいえば、今日われわれが素粒子と呼んでいるような極微の粒子が、やがて原子を構成し、その原子が分子を構成し、さらには巨大分子を、またさらには各種の有機体をとというふうに、物質は次第にその複雑性を増大していく傾向を持っていることは、いわば超巨大視野ともいふべきものに立脚する古生物学や地質学の立場からすれば余りにも明白なことといわねばならない。

しかるに、今日まで幾多の科学者たちは、こうした物質の複雑化の現象に留意することなく、ただ、熱力学上のエントロピーの理論に典型的に見受けられるような、「不安定」となり、「分解」し、「放散」して行くという物質の性質の別の一面だけを把えて、これに固執していたにすぎなかった。そして、このことは実は、「進化」ということこそ、動植物はおろか、全自然の基盤に存在する法則であるということに思い到らなかった視野の狭さにもとづくものといえる。われわれは、この「不安定」となり、「分解」し、「放散」していく物質とそのエネルギーが、他面において、以上のような進化の主軸を構成する複雑化の過程に吸収されていく冷厳な事実を熟視しなければならない。

- (2) さて、このようにして物質がその複雑性を増大するにつれて、われわれが注目しなければならないもう一つの顕著な傾向は、この物質の複雑化に対応して物質の意識の上昇が見られることである。このことは、われわれが一般の動植物について極めて常識的に考えても直ちに理解できることであり、さらにまた、それが人間において極限に達していることも直ちに明らかであるところである。ティヤールはその専門的立場から、こうした物質の根本的な現象を“law of complexity-consciousness”として把えるのである。

この法則は、その系として、物質の複雑化に対応して、環境による強制からの自由、ひいては有機体の自己の運動コースの選択決定の自由の増大がみられる、ということを含んでいる。

かくして、意識は、実は、物質の中へ、外から取り入れられるような何ものかではなく、それはまさに物質の基本的な性質ないし局面にほかならず、われわれの観察可能の領域では、「思考する人間」は、現在この物質の複雑化運動の最先端を構成しているものであり、しかもその人間自身が現在において、なおも未来に向かって発展していく進化の過程のただ一環を占めているにすぎないものであることを彼は強調するのである。

さて、このようにして、進化の運動の展開過程は、生命のない物質から生命を、そしてついには人間を創り出し、ここに彼のいわゆる“noosphere”（思考圏）を形成するに至ったのであるが、くりかえし述べる如く、われわれは決してこれをもって、進化の過程がその極点に達したと考えてはならないのであって、人間は現段階において、なるほどこの進化の運動の頂点に坐するとは云い条、それはあくまで、なおも未来に向う進化の全過程の中の一点を占めているに過ぎないものであることに留意しなければならない。

では、現在、人間はこの進化の主軸の頂点にあって、今後一体どこへ向って進んで行くのであるか。その行き先はどのようなものであるのか。彼によれば、それを知るためには、われわれはただ人間の「社会化現象」に注意しさえすればよいのであって、それはきわめて簡単なことである。われわれが人間の歴史のあとをかえりみると、人間は迂余曲折の道をたどりながらも、次第に複雑な社会化の歩を進め、ついに現代の段階に到達し得たものであることは、きわめて明瞭な「現象」であり「事実」であるといえるであろう。だが、彼が終始一貫主張する如く、進化の歩みはこれで以て完成したのでは決してなく、人間の進化には、したがってその社会化には、まだ無限ともいふべき未来が待っている。では、大自然（自

然と人間)を根底から押し動かしていくこの巨大な進化の運動が、人間とその社会化をどのようなところへ向わせようとしているのであるか。ティヤールによれば、生起するものはことごとく収斂していく。狭い視圈のみをもってすれば、人間の社会も、「不安定」となり、「分解し」、「放散」して行くが如くであって、実は、超巨大視野からすれば“when seen on a large enough scale” or “on a fantastically long time-scale”, ある一点に向って収斂して行くのであって、その収斂の一点が人間を待ちうけているといわなければならないのである。彼は、これを「オメガ点」omega point と呼んだ。オメガ点こそ彼の神学的立場における「キリストの神秘体」the mystical body of Christ に該当するものであり、大自然の進化はこのような一点を目指して収斂して行く過程にほかならないというのである。彼の他の表現をもってすれば、人間は現在“noosphere”の基盤の上に立って、その彼方に“Christphere”を目指して進行中であり、その“Christphere”完成の最後の一点がこのオメガ点であるというのである。

ここに、彼の科学者としての強固な信念と、神学者としての深い信仰の、分離し難い結びつきが極めて明確に表現されているといわなければならない。Bernard Tower によれば、ティヤールは、研究室にはいる時には、一時的にでもせよ、自分の信仰を棚に上げて置くというようなタイプの科学者ではなかった。ティヤールにとっては、いついかなる時でも、全然科学的でないことを言ったりしたりする必要のない人であった。彼にとっては、科学の法則に従うこと、もろもろの仮説を事実によって証明していくこと、ただそれだけが重要であった、ということであるが、その面目の一端がここに明らかに示されているといえよう。彼は一面においては神学者でありながら、常に科学者としての態度に終始し、彼の理論の真実性の立証を現象そのものにのみ求め続けた人であった。そして、それだけに彼は、以上のような立論にゆるぎない自信があった。さきの Bernard Tower は、

このような彼の心境を、

現代科学から得られた考えと、聖書や初期の教父たちの教えとを総合しようと試みる人は誰でも、攻撃の十字砲火に曝されることは必定である、ということを経験は十分に承知していた。だが、彼は断じてひるまなかった。彼は、絶えずどこかに異端を嗅ぎつけようとする神学者たちの群と、己れの視野の狭さを棚に上げて、理解不可能なことはすべて荒唐無稽と断ずる偏狭な科学者たちが構成するナイアガラ瀑布の上に張り渡した一本の綱の上をも渡っていく勇氣があり、かつまた、向う岸に到り着く自信を持っていた。彼は、“私は来るべき人のもとにおもむく”と言った。ちょうど主のもとに向って波の上を歩いて行ったペテロのように。(Teilhard de Chardin, p.17) と評している。

ともあれ、ティヤールにとって、神はこの意味において、単に超越的に「高きに在る神」(God on high) であるに止らず、常に同時に、人間にとって「内に在る神」(God within) であり、かつ、人間の努力が目指す「前方に在る神」(God ahead) でなければならなかった。さらに彼にとって、“faith in heaven” と “faith in earth” とは、実は、ただ一つの信仰の両面に外ならず、ここにおいて、人類は一丸となってこのオメガ点をめざして進み行くべく義務づけられているといわなければならないことになるのである。

だが、人間の現状をかえりみると、いつの日にか人類にこの希望のみたされる時が来ることが、保証されるであろうか。人びとはおのれの自由を濫用して帰すべきところを知らず、それぞれ勝手気儘な主張をして、今や人類は新しいバベルの塔を築き上げようとしているのではないのか。われわれは、ともすれば、こうした現状の乱脈の前に、絶望を感じざるを得ない状況に置かれているのではないのか。まさにそれは「嘔吐」に値するほどのものではないのか。

ティヤールは、この点について次のように考えを進めて行く。人間が、

この悲観すべき現実の状況をのりこえて、さらに進化の歩みを続けて行くことができるものと希望を持つことができるのは、われわれが、宇宙万物の基底において、疑いの余地もなく働いている進化の「不可逆的」な収斂現象を認めることができるからであるという理由にもとづく。では、何故にこの収斂現象を「不可逆的」とであると断定できるのであるか。それはほかではない。もし、進化の現時点において、人間各自が獲得した自由が、各自のほしいままに濫用されるとき、人間はおのれ自身の絶滅と、進化がこれまでに人間をして獲得せしめてきたところのすべてのものを一挙にして失うことを覚悟しなければならない筈であるに拘らず、神は人びとに「生きよ」と命じ、たとえ人びとが信仰を持たないとしても、人びとは「生きんとする意志」を本来的に内に具えており、現実生活においても生きんがためにあらゆる努力を重ねている。とすれば、この進化の方向が不可逆的であることは、もはやそれで明らかであり、彼のいう「オメガ点」は存在すべきなのであり、また存在するものといわねばならない、という理由にもとづくのである。

まさに、この不可逆的な、集中的な焦点への動きというものを抜きにして進化の法則を考えることは絶対的に不可能といわなければならない。人は進化の事実を認める限り、その進化の事実を追って、ここまでつきつめて考えるのでなければならない。科学者も哲学者も神学者も、この冷厳な事実を目を開かねばならない時が今や来ているのである。

従来のように、ただ、いわば分析のみをもってわが事おわれりとなし、しかもその分析とても、個々の人間のきわめて短かい生存期間に制約された狭隘な視野においてのみ研究を進めるに過ぎないのであっては、みすみす宇宙の、そして人間の巨大な真理が科学者たちの手から逃げ出してしまっただけであろう。

哲学者も、神学者も、科学者があくまで厳正な態度で、仮説を立ててはそれを事実によって検証し、事実によって検証しては、さらに仮説を進め

て、より深く、より広く真理を追求していくあの態度を身につけなければならないことをティヤールは終生主張し続け、自らはこの精神の権化ともいふべき姿で身をもって実践し続けたのであったが、さらにそれと同時に、彼は科学者たちにもまた世界を見る視圏を無限に拡大して行くべきことを要請して止まなかった。彼は、彼等が、かかる努力において必ずやその見る世界が、恐ろしいほどにも聖書の述べる真理と一致することに気づくであろうことを信じて疑わなかったのである。

この境地に到って、彼にとって自然の進化は、もはや神の愛のわざ以外の何ものでもなく、この神の愛のわざこそまさに、物質から生命を生み出し、ついには人間を創り出し、さらには、この現段階におけるすさまじい喧騒の中にも、人間をしてさらにその「社会化」を洗練し、その意識と自由とを高度化して窮極の「オメガ点」をめざして進ましめる[・][・][・][・]当のものにほかならなかったのである。

彼は、彼特有の科学的な超巨大視野に立って、ついにこのような境地をきり開くに至った彼にとって“reserch”は、まさに“adoration”であったのである。

(4)

以上、ティヤール・ド・シャルダンの人間観（それは科学的であると同時に哲学的・神学的なものであった）をきわめて粗雑に概観したが、以下、彼の思想の諸特徴をなすと同時に、現今のわれわれに示唆するところ大であると思われる若干の点にふれて置きたいと思う。

まず第一に、ティヤール・ド・シャルダンの思想は、まさしく「パンタ・レイ」の現代科学的解明ともいふべきものに当り、全くダイナミックであって、それは彼の進化過程についての徹底的で、確実な科学的知識に基づいていた。彼にとって、「進化」はあらゆる事実をてらす光であり、あらゆる線分が、それに従わねばならない曲線であったのである。と同時

に、彼の体系は、いわば開いた体系とでもいうべきものをなしており、人びとにさらに考え、さらに成長せよとせまる、まことに科学者にふさわしいそれであった。「ただ、あくまで現象や事実のみをして語らしめよ。」「私はまだ多くの点で迷いにおちいつているかも知れない。それらをよりよく改めるのは他の人びとの責任である。」（彼の主著「人間の現象」の結びの言葉）というのが彼の基本的な立場であった。

つぎに、彼の思想はその基底において、豊かな楽天観に支えられていた。それは、彼の科学的信念の強さに由来するものであった。彼は、生涯をかけてオーストラリアを除く他のすべての大陸を縦横に駆けめぐり、厳正な科学者の目で、これまでの科学者たちよりも、より深く、より広く、身をもって進化の現象にじかに触れ続け得た人であった。それだけに彼の信念は強かった。人類は、今後いかなる苦難や迂余曲折を経るにしても、必ずや、いつの日にか「オメガ点」に到達し得るときが来ることを、科学的立場から信じて疑い得なかったところからくる楽天観であった。これが彼の学問の第二の特徴といえるであろう。つぎに、彼の学問のスケールはきわめて大きいものであった。地質学と古生物学と古人類学と、その上それらの基盤を強固に支える進化の科学とに立脚して、彼のスケールは驚くべく巨大なものであった。さらにこれに加うるに、彼の哲学と信仰とがそれらに分離し難く融合していたのであるから、彼の学問のスケールは、未曾有の歴大さを持ち得たと言える。この広大な、気も遠くなるような視野に立つとき、これまで自己の狭隘な領域にのみ立てこもり、極端にいった分析をのみ重ねて総合を怠りがちであった一般の科学者たちに見逃がされていた驚くべき真実に、彼が気づき得ることになったことは当然のところであったといえるであろう。

そもそも、現代人の自己疑惑と自己嫌悪は、生物学を旧式の、分析をのみこととする物理法則にだけ結びつけることにもとづくものであって、今やわれわれは、われわれの時代にふさわしい衣を身につけなければならな

くなっている。いまやわれわれはアインシュタインの“time-space”をも超えて、“biological time-space”（生物学的時空——それは方向を持っている）の次元で自然や宇宙を見なければならない時代が来ていると見なければならない。そして、それができる人のみが現代人であるとさえ彼は主張する。このような学問のスケールの巨大さ、これが彼の学問の第三の特徴であろう。

第四の特徴として、彼の総合的な真理探求への愛の強さは無類といえるほどのものであったということがあげられるであろう。“Research is adoration,” というのは、彼がしばしば用いた言葉であった。この真理への崇敬こそ、彼の心底にあって彼の学問のスケールを、あの巨大さに到らしめ、かつあの偉大な総合体系にまで到らしめた秘密であったといわねばならないであろう。

最後に、第五の特徴として、われわれは次の点に注意しなければならないであろう。すなわち、彼における“research into the past”は、ここまで科学的に徹底して行けば、それは彼のいう如く直ちに“research into the possibilities open to the future”に転じ得るものであることである。彼は単に宗教的な意味においてのみでなく、同時に科学的な意味における予言者であったといえるのである。彼の学問の持つ大きな魅力の一つが、ここにも存在するといえるであろう。

(5)

ティヤール・ド・シャルダンの思想とその特徴を概観すれば、およそ以上の如くであるといえるであろう。バーナード・タワーによれば、現在、有力な科学者たちの側からのティヤール批判として、彼が、われわれの存在の根拠として神を要請することは、まだ十分に納得はできないにしても、偏見のない科学者ならば、誰でも健全と認めざるを得ない科学的方法論を持つことにおいて、ティヤールは、多くの神学者たちよりはるかに優

越した地位を占めていると述べている、ということであるし、また、他方テイヤールの立場に共鳴する神学者たちも今日ますますその数を増加しつつあるということである。

生物学者ジュリアン・ハックスリーは、『人間の現象』の英語版に長い序文を書いてこれを讃え、神学者カール・ラーナーもまたあるテイヤール研究書に序文を与え（Robert North: Teilhard and the Creation of the Soul, 1967.）さらに経済学者K・E・ボールディングにいたっては、その著『二十世紀の意味——偉大なる転換——』において、「現代の世界には、私たちが通過している転換の性質について右のようなヴィジョンを持つ人たちが、その立派な実現のために生涯を献げようと決意している人たちが、そういう人たちが国や文化の相違を越えて作っている「見えざる大学」がある。この大学の一員になるのには、哲学的、宗教的、政治的な立場が異なっていて構わない。これは創立者もなく、学長もなく、建物もなく、組織もない大学である。創立のメンバーがいるとしたら、ピエール・テヤール・ド・シャルダンのようなイエズス会士、オールダス・ハックスリーののようなヒューマニスト、H・G・ウェルズのようなサイエンス・フィクションの作家が含まれるであろうし、名誉学位はアダム・スミス、カール・マルクス、教皇ヨハネス二十三世、いや、フルシチョフ、ジョン・F・ケネディにも贈られるであろう。存命中の代表者は、まだかなり小さなグループである。しかし、彼らは、世界の将来をその手で、少なくとも、その心で支えている人たちであると思う。」「この見えざる大学のためとあれば、私は恥を知らぬ宣伝家になろう。」（清水幾太郎訳・岩波新書 175 頁）とまで礼讃している。

まさに、テイヤールは、今日の世界の最も大きな話題の一つとなっているのである。私はパンタ・レイのなまなましい直感が、このような20世紀にふさわしい衣をきて、力強くよみがえってきていることに限りない魅力を感じるものである。

長戸路千秋

彼は、われわれに呼びかけている。科学者よ、進化は決して単なる一学説にすぎないものではない。明白な根源的事実であり、現象なのだ。地質学や、古生物学や、古人類学が立っている超巨大視野に立って、進化の事実が根本的なものであることに目を開け。狭い領域での分析にのみふけてはならない。分析は高度な総合に裏づけられることによってのみその威力を発揮する。一大総合観に立って再出発せよ。おそろしい程の新しい風景がそこに展開するであろう。

哲学者よ、個々人の狭くて短い人生体験だけからえられた視野で人間を把握せんとする無駄な努力をやめよ。それは、しょせん、思想的なバベルの塔を築き上げんとする無益なわざにすぎない。科学によって視野を無限に拡大せよ。そこに驚くべく深い人間の真実が露呈するであろう。

神学者よ脚下を看よ、科学の成果に目を開け、それを無視することは、宗教を無力なものにするだけである。科学に立脚した一大総合の視野に立って、そうすれば、われわれの啓示宗教の真実性が、われわれを圧倒するほどのものであることに気づくであろう。

一般の人びとよ、われわれはパンタ・レイの現実から如何にしても脱することはできないのだ。われわれがそれから脱することができないのであるならば、われわれはその中に立ち帰って、改めて、われら何をなすべきかを考えるほかに道はないのだ、と。

ティヤール・ド・シャルダンのこうした呼びかけは、われわれ現代人にとってこの上なく重大な意義をもっているといわなければならない。私はさきに引用したボールディングの言葉に深い共感を覚えるものである。

本稿を草するに当たり参考にした文献を次にかかげておく。

(1) 著 作

- | | |
|------------------------|-------|
| The Phenomenon of Man, | 1960. |
| 美田稔訳・現象としての人間 | 昭和39年 |
| The Appearance of Man, | 1965. |

- The Vision of the Past, 1960.
Le Millieu Divin, 1963.
三雲夏生訳・宇宙のなかの神の場 昭和43年
The Future of Man, 1964.
Man's Place in Nature, 1966.
島崎通夫訳・自然のなかの人間の位置 昭和43年
Hymn of the Universe, 1965.
The Making of a Mind
Letters from a Soldier-Priest 1914—1919, 1965.
Letters from a Traveller, 1966.

(2) 伝 記

- C. Cuénot : Teilhard de Chardin
A Biographical Study, 1965.
R. Speaight : Teilhard de Chardin A Biography, 1967.

(3) 研 究 書

- E. Rideau : Teilhard de Chardin
A Guide to his Thought, 1967.
I. Lepp : The Faith of Man
Meditations Inspired by Teilhard de Chardin, 1967.
B. Tower : Teilhard de Chardin, 1966.
Henri de Lubac : The Religion of Teilhard de Chardin, 1966.
N. Barybrooke : Teilhard de Chardin
Pilgrim of the Future, 1964.
C. E. Raven : Teilhard de Chardin
Scientist and Seer, 1962.
トレモンタン・美田稔訳・テイヤール・ド・シャルダン, 昭和41年